

機能障害 (GOT 378 IU/l GPT 331 IU/l) 認め入院となり、血液浄化療法により軽快した。各種ウイルスマーカー陰性、自己免疫性肝炎なども否定され、DLST よりジクロフェナクナトリウムおよびアセトアミノフェンに陽性を認めたため、本症例は薬剤起因性の肝障害および著明な血小板減少を呈したと考えられた。肝生検組織像は薬剤性肝障害に矛盾しない像であり、骨髓組織像はほぼ正常像であった。同剤による肝障害および血小板減少の各発生頻度 0.05% 未満であり報告した。

15) CTAP を用いた肝結節の血行動態評価とその予後

坪井 康紀・市田 隆文
杉谷 想一・稲吉 潤 (新潟大学)
朝倉 均 (第三内科)

CTAP と各種造影検査が施行されかつ組織学的に診断された最大径 20 mm 以下の47結節の画像所見と臨床経過について検討した。

進行性肝癌は5例全てに門脈血流低下かつ動脈血流増加を認めたが、高分化型肝癌13例は様々なパターンを示した。再発までの期間は門脈血流が保たれている症例の方が長い傾向が認められた。境界病変では門脈血流低下かつ動脈血流増加を示した1例が進行癌へ進展した。組織学的に悪性所見のない15例はほとんどが門脈血流が保たれており、経過観察中に消失したものが5例存在した。

CTAP による門脈血流評価を含めた血行動態の評価は結節の質的診断、治療および予後の指標として有用と考えられ、門脈血流の低下が悪性度の指標になりうることが示唆された。

16) 肝細胞癌の術前画像診断と切除後診断の比較—画像診断はどこまで肉眼診断に迫れるか?—

稲吉 潤・市田 隆文
杉谷 想一・坪井 康紀 (新潟大学)
朝倉 均 (第三内科)
白井 良夫 (同 第一外科)
伊達 和俊 (同 第一病理学教室)

【目的と方法】当院及び関連施設で切除された肝細胞癌 100 結節を肉眼型 (金井ら 1986) 別に分類し肝内転移、門脈塞栓 (以下 VP/IM) 陽性率、術前治療の壊死効果を評価し肉眼型毎の生物学的特性の違いを検討し

た。

【結果】VP/IM 陽性率は単結節型 (1型) 12.5% に比し、単結節周囲増殖型 (2型) 69.0%、多結節癒合型 (3型) 22.5% と有意に高かった。治療結節の壊死効果は3型が最も不良で1型が最も良好であった。術前診断と切除後肉眼型の一致率は 61.0% であった。

【結語】肝細胞癌の肉眼型は生物学的特性の違いを反映しており総合的画像診断で肉眼型の診断精度を上げることが重要である。

17) 原発性肝細胞癌に対する SMANCS の治療成績と集学的治療のなかでの位置付け

太田 宏信・三木 巖
古川 浩一・真船 善朗 (済生会新潟第二病院)
吉田 俊明・上村 朝輝 (消化器内科)
林 俊彦 (新潟臨港総合病院)
(消化器内科)

【目的】肝細胞癌に対する集学的治療のなかでの SMANCS 動注の効果と役割について検討する。(とくに肝炎ウイルスからみて)

【対象】1994年4月より SMANCS 動注を施行した HBV 陽性18例、HCV 陽性51例の肝細胞癌症例計69例 (計 169 回動注)

【結語】①HBV 陽性肝癌症例は単発例が多く、SMANCS 動注は治療および肝内転移の有無の診断のために行い、その後切除等の積極的根治療法を考えるべきである。②HCV 陽性肝癌症例は再発を常に考慮した診断、治療が必要で、多発例でも繰り返しの SMANCS 動注で完全壊死あるいはコントロールできる症例もある。

18) 内視鏡的結紮術を用いた十二指腸静脈瘤の一例

内藤 彰・宮川 亮子
平野 克治・長谷川 聡 (県立中央病院)
北 啓一郎・山崎 国男 (内科)
高木健太郎 (同 外科)

症例は64歳C型肝硬変患者、下血、高度の貧血にて入院、内視鏡にて下行脚に著明な静脈怒張、CT、血管造影にて臍頭部から右腎下極までの遠肝性の血行を認めた。治療検討中、突然の大量下血となり、内視鏡にて十二指腸静脈瘤からの出血を確認した。緊急止血のため4箇所 EVL を施行、静脈瘤の消失を認めた。食事開始